審査結果の要旨

論文提出者　白　龍雲

論文題目　ショッピングモールにおける回遊性の変容過程に関する研究

この論文は、20 世紀に劇的な発展を示した商業施設の中で、ことに一般人が利用、滞在する機会が多く公共性の高いショッピングモールに注目し、その空間構成が 1950 年代以降半世紀にわたって遂げた変容の実態とその要因を明らかにしようとするものである。

論文は　序および 4 つの章から構成される。

序では研究の背景と目的、研究方法と論文の概要などを述べている。

第 1 章では研究に関連する商業施設を歴史的に概括し、古典古代のアゴラ、フォールム、19 世紀以降発展したアーケード、デパート、モールについてそれぞれの建築的特徴をまとめている。また、研究の対象となるモールの事例の選択基準とリストを示す。

第 2 章ではモールに関する既往研究を概観し、問題点を指摘した上で、新たにモールの変容過程を十全に説明するための分析方法を提案、事例分析の結果を明らかにする。

モールの変容に関する既往研究では、その原因として郊外から都市部へ立地が変化したことを挙げる説、モールの内部構成に見られる基本形が複合化する過程と捉える解釈などがある。こうした説では、郊外モールのオープン化、モール外部のアクセスの違いなど重要な変化を説明できないとする。代わって、外部からのアクセスと内部における空間単位相互の連結の方式、連結程度が回遊性を規定する上で重要と考える立場から、アクセス形式と連結程度によってモール空間の類型を整理する。結果、四つのアクセス形式と三つの連結程度が確認でき、それらを組み合わせた 12 通りのうち 8 つの類型が実際に存在することが確認する。

つぎに、奥行概念によって利用者の遭遇程度を検討し、50 年代以降のオープンモール化の過程が、利用者の遭遇あるいは回遊と関連する、建物と周辺の関係というファクターに対応していることを明らかにする。

第 3 章では、前章で論じた周辺との関係に基づいた変容過程の説明では不十分な事例があることから、既往研究を踏まえ回遊空間の 4 つの形式を整理し、モールの変容が求心型から遠心型、並列型、複合型へと変化する過程であることを明らかにする。

さらに Passini の環境知識の分類ならびに Shurtz の作品化の概念に基づき、モールの変容過程が探検的空間を創造する行為であるとともに、作品化の過程として解釈できることを示した。

これと合わせ、商業施設が Venturi 以後一般化した外部のシンボル性を回復するような変容を遂げた過程とは異なる変容過程であったことを指摘している。

第 4 章では、上記の分析を考察した結論として、20 世紀後半に遂げたモールの劇的な変容が、回遊を規定する空間から利用者が積極的に回遊できるような空間への変容であったこと、モールが他の公共的な施設と異なる内外部の編成形式を備えた独自の建築型となったことを明らかにした。

以上のように、この論文は、商業施設としてのショッピングモールが一般市民の生活の中に定着し、空間の回遊を通し他者との遭遇を日常的に可能とする開かれた公共の場へと変貌してきたことを実証するとともに、今後の公共的な空間の計画・設計のための一つの指針を示した。また、人の回遊と遭遇、探索行動を評価する既存の方法を、改良、総合し、商業建築という限定はあるものの建築の実態に即した分析、評価が可能となる方法を提案し、その適用可能性を実証した。このように、本論文は、建築の設計論において新しい知見を示し、さらに計画学的な研究方法の改良を行なったものとして、この分野における発展に寄与するものである。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。